

読書通信



No. 117

① 最近は「産経・読売・日経」対「朝日・毎日・東京」という構図が明確になっている。秘密保護法、憲法解釈、集团的自衛権、NHK会長騒動、靖国参拝、原発、沖縄問題などこれほどメディアが争点とする事件が多発する政治環境も珍しい。徳山喜雄「安倍官邸と新聞」（集英社新書、820円）は副題「二極化する報道」の危機）そのままに前掲6紙の報道や論調を見出しも合わせて丁寧と比較論評している。

著者は朝日の記事審査室幹事で仕事柄びつたりの著作だが、発行日は朝日の慰安婦報道お詫

び事件の直前だった。その後だったら構成、内容がどうなっていたかなど、言うだけ野暮だが、二つのグループに分かれた各紙が意見を一方的に主張し、それが言いつばなしで終わっていることを著者は危惧する。そこには官邸の露骨な情報コントロールもちらついている。興味深いのは、左右はつきりさせず問題点の指摘だけで終わっていることの多い日経の論調を、著者がむしろ高く評価していることである。これも朝日的良識ということになるのだろうか。

② 宇宙への挑戦も面白そうだが深海も捨てたものではない。むしろ海洋大国・日本にとって深海のほうが夢は大きそうだ。東大阪の中小企業が携わった人工衛星「まいど一号」の向こうを張って、東京下町の中小企業が挑んだのが

深海無人探査機「江戸っ子一号」だった。町工場のオーナーの夢がどのように実現していったのか、山あり谷ありの一部始終を描いたのが山際淳一郎『深海8000mに挑んだ町工場』（かんき出版、1512円）である。

すさまじい水圧にも壊れないガラス球の開発をはじめ技術的難問には物怖じしない経営者たちも、資金調達、工程管理、プロジェクトマネジメントは苦手だ。それを応援した信金、研究者たちがいい。気持ちの良い作品である。

③ 明治維新を犬から見る。コロンブスの卵の発想は見事に成功している。仁科邦男『犬たちの明治維新』（草思社、1728円）は膨大な史料を読み解きつつ幕末や明治の犬たちの生態や役割から歴史を描いた労作である。吉田松陰

の米国密航を横浜の村犬が阻んだ、幕末まで飼った犬は少なくともつばら町犬や村犬（つまり野良犬）が人々と共生した、西郷が西南戦争に犬を連れて行き兎狩りをした理由とは等々面白い話が続く。犬好き、歴史好きには格好である。

④ メガバンクによる巨大損失隠しを暴こうとする新聞記者。これに金融庁の局長、政党党首、銀行首脳、米系証券会社の日本人幹部の暗躍を絡ませた、小野一起『マネー喰い』（文春文庫、637円）は元共同通信記者の小説第一作という。「佐藤優、絶賛」のキャッチコピーと同氏の解説に引かれて読んだが、個人的には絶賛ほどではなかった。しかし一応の水準ではある。中年の主人公が出世を捨て生涯一記者として真実を追求する設定が効いている。（純）